

宮崎市櫛一号墳木槨の調査

やなぎさわかずお
柳沢一男

平成一四年九月末、発掘調査中の宮崎市櫛一号墳あおきで埋葬施設の木槨が確認された。短時間だったがNHK全国ニュース

で放映され、また新聞各紙が「国内最大級の木槨発見」という見出しで取り上げたこともあって反響が大きかった。多くの方々から問い合わせがあったほか、「現地説明会も開かず、市民に公開しないまま埋めてしまったのはけしからん」というお叱りもいただいた。その点はお詫びしたいが、授業の一環として学生の夏休み中に行う調査のため、後期授業日まで調査を終えなければならぬ事情があったことをご理解いただきたい。ここでは、櫛一号墳のこれまでの調査と、今回確認された木槨の概要をかいつままで紹介したい。

櫛一号墳の位置

櫛一号墳は、九州東南部の日向灘に面した砂堆上につくられた墳長約五二メートルの前方後円墳である。宮崎市郊外の吉村町江田原にあり、宮崎市立櫛中学校のすぐ南側に接している。板付II式の土器棺や石組み墓などが発見された櫛遺跡は中学校校庭の一角にあり、櫛一号墳はその調査地点から南約二五〇メートルにあたる。

櫛一号墳は海岸線に平行して形成された三〜四列の砂堆のうち、もっとも内陸側砂堆の先端、標高七〜九メートルの地点につくられている。周辺の低地部より三〜五メートルほど

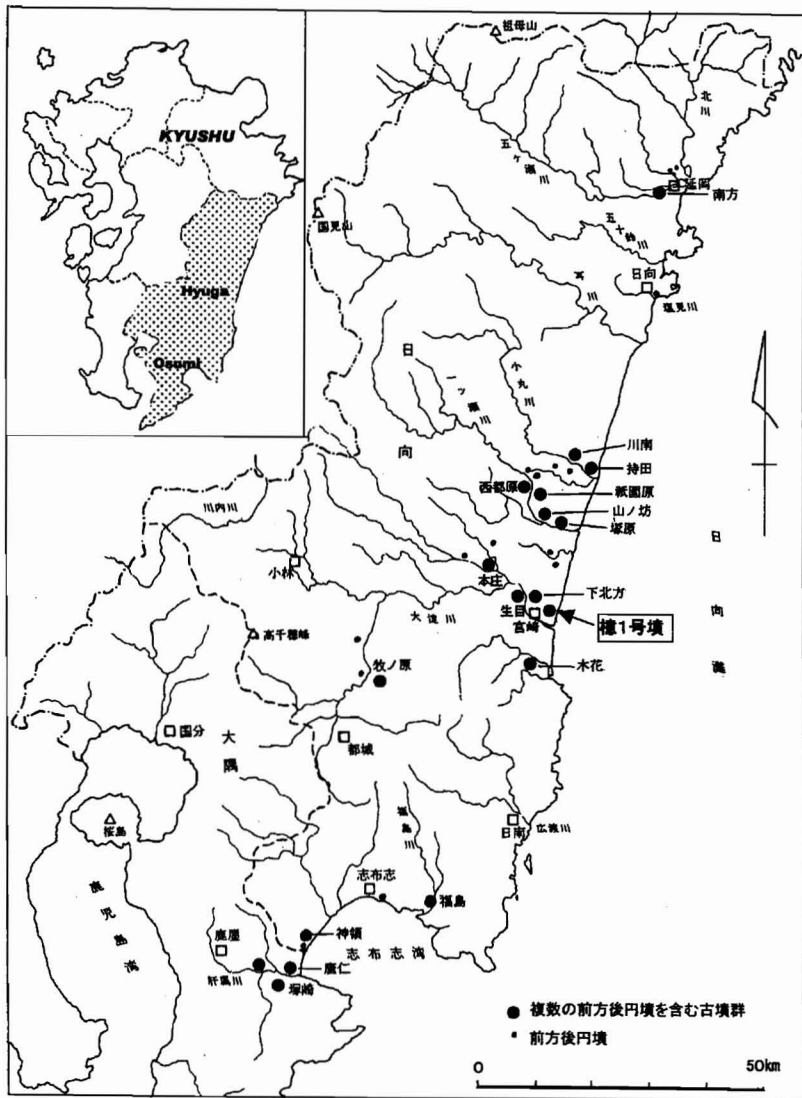


図1 南九州古墳分布図



写真1 櫛1号墳遠景

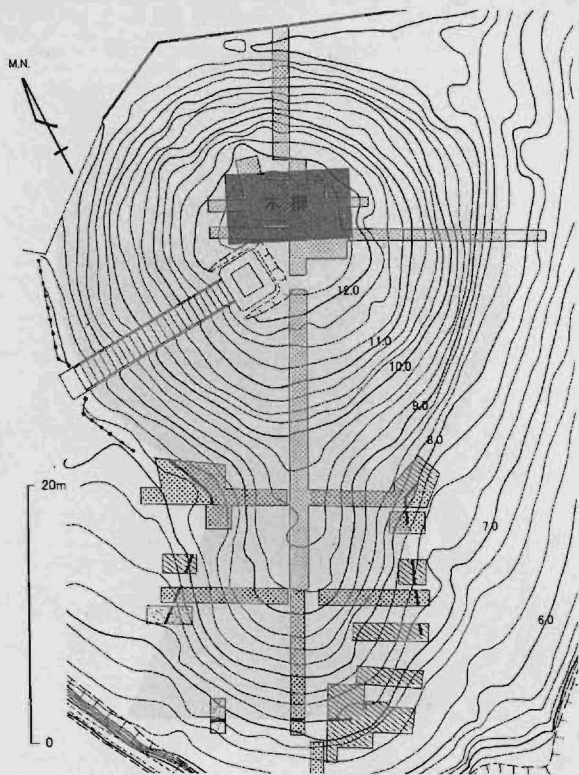


図2 墳丘と調査区位置

高い砂堆上には、弥生時代以降の遺物散布が認められ、長期にわたって集落・墓地として利用されていたらしい。周辺に数基の古墳が分布し櫛古墳群と呼ばれているが、いずれも未調査で内容不明である。

筆者は学生とともに県内の古墳の測量調査を継続しているが、一九九四年に櫛一号墳を含めて前方部が短小で低平な三基の前方後円墳の測量を行い、それらがいずれも嚮向型に類似する可能性があることを指摘した。⁽¹⁾平成一二年の夏から地権者(宮崎市)の協力を得て櫛一号墳の調査を開始し、今回は第四次調査にあたる。

墳丘の形態と構造

墳丘は砂堆の延長方向に沿って後円部を北側に、前方部を砂堆端の南側に向ける。後円部の北側に区画溝がめぐらしているが、大半が中学校の校庭となり詳細不明である。

前方部は砂堆の高まりを整形したもので、明確な盛土や外表の葺石はみとめられない。表土下は汚れた間層を挟んで弥生土器や各種の石器が含まれる黒砂となる。この黒砂は櫛遺跡から連続する弥生時代の遺物包含層で墳丘の基盤とみられ

る。黒砂下部はしだいに色調が明るくなり、締めりのない灰白色の風成砂となる。

墳丘端部は平坦な基底面と墳丘斜面とのあいだの傾斜交換によって確認できる。前方部前面側では三個所のトレンチで、側面は九個所のトレンチで墳端が判明したが、両隅角は攪乱や墳丘の流失によって位置と形状を確定することができなかった。前方部の平面形は不整形な形態だが、前面側に向かって撥形に開く可能性がたかい。

くびれ部は東・西側の調査区で確認された。保存状態が良好な西側くびれ部では、後円部平面形が正円を描かず連結部状をなすことは注意される。

後円部の平面形と規模は設定したトレンチの墳端付近が攪乱を受け確定することができなかったが、現状の傾斜交換線付近をおおよそその墳端近くとみて良さそうである。以上から櫛一号墳の墳丘は、墳長約五二メートル、後円部が直径約三メートル、高さ約四・五メートル、前方部が長さ一七メートル、高さ一・七〜二メートル、くびれ部幅約一五メートル、前面幅おおよそ二四メートルの規模と推測される。

なお後円部墳丘は、墳端から上位二メートルまでが地山整



写真2 後円部調査区全景（南から）



写真3 木槨南北断面



写真4 木槨東辺基底部材痕跡

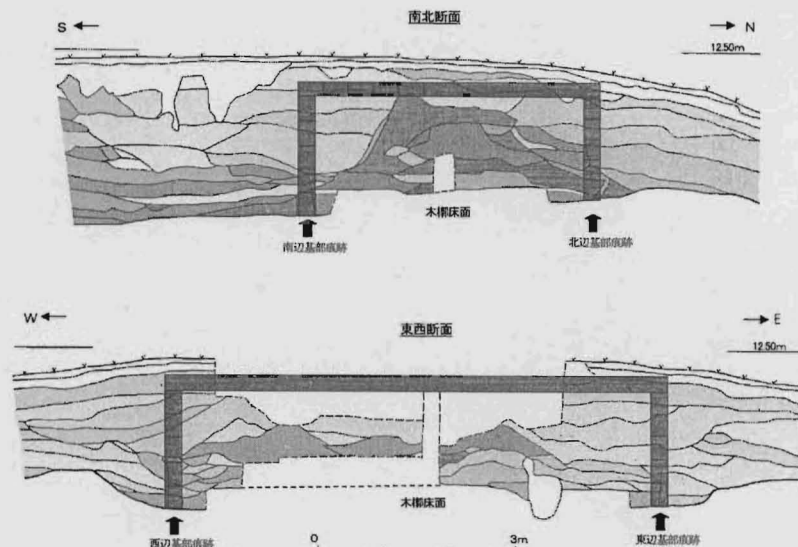


図3 木槨の復元

形、その上部二・五メートルが人為的な盛土（正確に言うと盛砂）である。また後円部頂と前方部頂を結ぶ斜面下部から、墓道ないし作業道のような溝状遺構の一部が確認されたが詳細はわからない。

後円部の埋葬施設

後円部で確認された埋葬施設は、整地面上に構築された木槨とその後に営まれた直葬の木棺である。木棺は規模も小さいうえ副葬品もないため二次的な埋葬とみられる。墳丘主軸に直交する木槨は墳頂平坦面中央から北側に大きく偏るが、南側に他の埋葬施設がないことから中心埋葬施設とみて間違いない。

木槨は現墳頂面から二・五メートルの深さに底面を置き、内法で幅四メートル、長さ七・二メートル、高さ約一・五メートル程度の規模と推測される。木槨の調査は南北辺・東西辺の中央付近を断ち切るトレンチでおおよそその位置と規模を確認したにすぎず、床面調査もトレンチの一部で行ったのみで、埋葬棺の配置状況や副葬品などは不明である。

木槨は構成木材が腐植し、最下部に配置された木材痕跡を

除いて形状や構造を知る手がかりはほとんどない。木槨の構造を理解するには槨の崩壊過程の検討が必要だが、調査データの分析が十分でないため概略を述べることにしたい。

まず現在判明している木槨基部構造と墳丘盛土との関係から述べておこう。

木槨は、砂堆の高まりを削っておおよその整地面をつくり、その内側をさらに五〇センチほど掘り込んだ平坦面に最下段の木材を配置して構築している。最下段木材の内側は二〇〜三〇センチの厚さに砂を敷いて床面とし、木材周囲に砂を積んで補強する。木材の長さ・高さは不明だが、厚さは南側長側壁と西側小口壁で二五センチ程度と確認され、角材と呼ぶのがふさわしい。木槨内法の規模が確定できたのは、最下段木材の四辺の原位置が明瞭に観察されたことによる。上部の壁構築法は不明だが、おそらく最下段と同様な槨材が使用され、木槨の構築と後円部盛土が同時平行に進行したと思われる。

つぎに木槨の崩壊過程は、天井部材の腐朽に伴って天井を覆っていた黒砂が槨内に流入したのち、長側壁材が外側盛土(砂)の土圧を受けて槨内に倒れ込んだと推測される。その

段階の木槨内は、流入した砂でかなりの部分が埋没しており、倒れ込んだ槨材は流入砂と盛土のあいだで圧縮され、腐植の過程で生じた空洞に周辺の砂が流れ込んだものと思われる。木槨内の流入土が「ハ」字形に大きく下膨らみした堆積状況と、埋土と盛土とのあいだに数センチメートルの厚みをもつ異質な砂層はこうした崩壊過程をしめすものである。

それにしても木槨規模はあまりにも大きい。当然のことながら、長側材や小口材を内側から支える支柱配置や、あるいは内部の間仕切りなどもあるかもしれないが未確認である。これまで日本列島内で確認された木槨の場合、大型墓墳内に構築されるのが一般的で、このように最下段に木材を収める程度の浅い掘り込みしか伴わないのは異例である。こうした構築技法や木槨の規模から見ると、この木槨は掘り込み墓墳の代替として案出された、木材を積み上げた構築墓墳と言いつ換えることができるかもしれない。

築造年代と古墳の意義

橿一号墳の墳丘と後円部から発見された木槨の概要は以上のとおりである。なお、後円部墳頂面を掘り下げる過程で、

崩壊した木槨周囲から数十片の土師器が出土している。細片化したものが多いが、高杯四点と小型丸底壺(鉢)一点の器種が判明している。それらの器形は九州北部や近畿地方の布留式系に類似するが、調整にミガキ手法を施さない地域色をもつ。久住猛雄氏に実見いただき、布留一式に併行する可能性が大きいと教示いただいたが、纏向型に類似する墳形ともにもう少し検討が必要だろう。

列島古墳分布の南端域ともいえる南九州地方の古墳出現時期について、前期後半を大きくさかのぼらないとする従来の通説は大幅に修正する必要がある。ちなみに、列島最南端の前方後円墳群を含む鹿児島県肝属郡高山町の塚崎古墳群では、五基の前方後円墳のうち四基は前期の築造と推測され、それぞれ纏向型類型→箸墓類型→西殿塚類型→五社神類型へという墳形変化をたどることができる。また橿一号墳の所在する大淀川下流域では、宮崎市生目古墳群に二〇〜一四〇メートルの三基の前方後円墳があり、箸墓類型から柄鏡形類型に継続し、前期に限れば九州最大規模墳からなる首長墳系列とみられる⁽³⁾。三一基の前方後円墳を含む西都市西都原古墳群においても、纏向型類型(八一号墳)を嚆矢として大半の前方

後円墳が前期に築造されたと推定される⁽⁴⁾。

このように南九州における古墳の出現は、前期初頭にさかのぼる可能性がたかい。橿一号墳がどのような脈絡のなかで築造されたのか、木槨内の調査をまわって改めて検討する必要があるが、纏向型に類似した墳形の採用と木槨の採用は、本地域首長とヤマト王権とのいち早い接触によって登場したことは間違いない。古墳分布域南端域にもかかわらず、前期〜中期中葉まで九州最大規模の前方後円墳を輩出しつづけた南九州諸勢力の政治力学を支えたものは何か、疑問は尽きない。

(宮崎大学教育文化学部教授)

〔註〕

(1) 柳沢一男一九九五「宮崎県の古墳資料(二)」『宮崎考古』第一四号

(2) 柳沢一男一九九九「南九州の古墳の出現」『第一一回人類史研究会要旨』

(3) 柳沢一男一九九八「生目古墳群」『季刊考古学』六五号

(4) 柳沢一男一九〇〇「西都原古墳群」『季刊考古学』七一号